Time after time

南　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｉｍｅ　ａｆｔｅｒ　ｔｉｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ１８７４Ｖ

【作者名】
南　晶

【あらすじ】
前作Ｇｅｍｉｎｉのその後のお話です。
時は平成２２年１２月。
１６年後の彼らの今は・・・？

前編　－美咲－（前書き）

前作Ｇｅｍｉｎｉのその後のお話です。
そちらも読んで頂けたら嬉しいです。

前編　ー美咲ー

平成２２年　１２月２０日
もうすぐクリスマスだ。
あたしはカレンダーを見つめて溜息をついた。

大学時代の合唱部の先輩から、軽音部のボーカルだった圭介さんの訃報の連絡があったのは昨日のことだった。
享年３６歳。
ちょっと外国カブレした仕草と色素の薄い髪と目で、エキゾチックな雰囲気だった。
まだ若いのに。
高速道路での交通事故だったらしい。
１６年前の夜店ライブで、ハスキーな声で歌ってた長身の彼を思い出した。
電話をくれたのは、当時、合唱部の部長だった先輩だ。
実は圭介さんのことが密かに好きだった先輩は、彼見たさに何度も軽音部に「やかましい！」と怒鳴り込んで行き、みんなのひんしゅくを買ってたっけ。
あたしは、青春時代を思い出して、一人で含み笑いをした。
怒鳴り込んでいく先輩といつももめてたのは、あたしが生涯忘れる事のできないあの人だ。

宮崎優

声に出さず、口の中であたしは彼の名を呟いてみる。
彼のことを思い出す度、あたしの鼓動が速くなり甘酸っぱい思いで胸がいっぱいになる。

あんなに狂おしいほど、愛にどっぷり浸かったのは学生時代の3年間だけだった。
彼以上に誰かに愛されたことはなかったし、あたしも彼以上に好きになった人は、もう現われなかった。

チュニックの裾を引っ張る小さな手に気が付いて、あたしは我に返った。
今年やっと小学1年生になった娘の奈々が、ぼんやりしていたあたしの顔を心配そうに見つめている。
くせのないサラサラした娘の髪をなでて、あたしは優しく言った。

「奈々、ママのお友達が亡くなったの。今晩、お通夜に行ってくるからパパが帰ってきたら、一緒にご飯食べに行ってね。」
「おつやってなあに?」
娘はあどけない顔で首を傾げた。
あたしは両手でそのかわいいホッペをフワっと挟んで言った。

「死んでしまったお友達にさよならする会のことだよ。もう会えなくなっちゃうからね。」

◇◇◇◇

先輩とは通夜の会場で現地集合する予定になっていた。
あたしが今、夫と娘と住んでいるマンションから、会場の浜松市まで高速道路を使えば2時間の距離だ。
そんなに親しい間柄でもなかったあたしは、翌日の葬儀に参列するのは気が引けて、あえて今晩行くことにした。
優と付き合い出したあたしに、圭介さんは偏見を持つことなく、優しく接してくれた。
最後のお別れを言う必要は十二分にあったが、あたしに下心が無い

と言えば、それは嘘になる。
こんな時なのに、あたしはそこでもう一度優に会えるのではないかと期待していたのだ。

「浜松でやってる通夜に今から行くの？もう間に合わないだろ？」

5時半になってやっと帰ってきた夫が、時計を見ながらブツブツ言っている。
あたしは気にしないで、玄関で革靴を履いた。

「通夜は遅くに行ってもいいのよ。だから早く帰ってきてって言ったのに。あなたが帰ってこないから、あたしが出かけられなかったのよ。」
「分かったよ。気をつけて行って来いよ。奈々と今からマクドナルドでも行ってくるよ。」
「ごめんなさい。今日は適当にやってて。」

出て行くあたしを、お腹が最近出てきた小柄な夫が手を振って見送った。

マンションの駐車場に止めてある白い軽自動車にあたしは乗り込んだ。
無意識にアクセルを踏み込んでいくうちに、あたしの脳裏に学生だった16年前の記憶が蘇ってくる。
優、良、亡くなられた圭介さん・・・・。
みんなと過ごした20歳の時が、あたしの人生で一番濃密な時期だった。

あの盆踊りのライブで、一世一代の告白をされた後、あたしは女の子である優と恋人として付き合い出した。
あのライブの後、優が女の子だったこともバレた後で付き合い出したんだから、その後3年残ってた大学生活は、あたし達はちょっとした有名人で過ごした。

付き合って分かったのは、彼が気性が激しくて、短気なのに、少し不安定なほど異常な寂しがりで、とにかくややこしい人だと言うことだ。
彼はとにかく肌に触れたがった。
多くの友人に、女同士の肉体関係について聞かれたが、彼と関係するに当たって、あたしは不満を感じたことはなかった。
理由としては、最初の相手が優だったので、男性と比較することができなかったということ。
もう一つは、優が求めるのはとにかく肌のぬくもりであって、生殖行為でなかったことだ。

「人肌に触れてる時が一番落ち着くんだ。だから俺はこうしてるだけでいい。」

優はいつもそう言ってあたしの胸に顔を埋めて眠ってしまった。
天使みたいなあどけない顔を見ながら、あたしは彼の頭を抱き締めて一緒に眠る。
激しい行為はなかったけど、あたしにとって体の関係ってそういうことだった。

卒業するまでの3年間、恋人同士だったあたし達は、卒業と同時に別れた。

別れた理由は、よくある話だ。
バブルが弾けて、日本経済史上初めての就職氷河期なる時期にあたし達は卒業することになってしまったのだ。
あたしは地元の神奈川県で何とか、1年契約の小学校非常勤教員の口が見つかった。
優は、卒業当時、まだ就職先が決まってなかったのだ。
もう一つ言えば、優の双子のお兄さんの良も、決まらないまま卒業することになった。
その当時、そんな学生はゴマンといて珍しい話でななかった。
卒業後、無職のまま下宿生活を続ける訳にも行かない二人は、実家の愛知県に帰ることになってしまったのだ。

「仕事もないし、今後の見通しも立たない。今の俺にはお前に待っててくれって言える自信が無い。俺は女だし、結婚もできないから美咲について来てくれって言う資格もない。だから、今は別れよう。俺が自信がついたら、必ず迎えに行く。でも、その時、お前が誰かのものでも、俺は責めないよ。」

あたしは泣いて彼にすがったけど、彼はどうしても譲らなかった。
男気のある優らしい選択だったと思う。
実際のところ、岐阜寄りの愛知県と神奈川県は遠すぎて、別れたらすぐに会えない関係になるのは一目瞭然だった。

4月になってあたしは自分の仕事でてんてこ舞いになり、優からの電話に出ることも難しくなった。
どちらともなく、あたし達は連絡が途絶えてしまったのだ。

風の便りに、地元でも就職先が決まらなかった優が、アメリカの音楽専門学校にギター留学したと聞いた。
あたしの元に、その彼からの連絡はなかった。

その時には、あたしたちは既に恋人と言える程、連絡を取り合う関係ではなくなっていたのだ。

あたしは非常勤講師をしながら、彼の連絡を待っていた。
でも、社会に出てからの最初の3年間は、学生時代の甘酸っぱい思い出を全て払拭するほどにハードで、感傷に浸る暇さえ与えられなかった。
身の心も疲れ果てた時、同じ小学校で教員だった夫と知り合い、あたし達は付き合い出した。
疲れた心が単に拠り所を求めたのだと思う。
あたしより8年年上で、教職の経験も多い彼といると、勉強になったし、何より安心できた。
相談相手が傍にいるだけで、女って自信が出るものだ。
当然の成り行きのように、あたし達は職場結婚して、娘を授かってからあたしは仕事を辞めた。

車の窓から見る街並みはクリスマス一色で、華やいだ雰囲気だ。
こんな時期に亡くなるなんて、お気の毒に。
同じ年代の友人が亡くなったのは、初めての経験だった。
これから歳を重ねるごとに、こういう経験は増えていくんだろう。
いつまでも若くはないんだ。
あたしはバックミラーに映った自分の顔をチラリと見た。

後編

ナビの誘導どおりに、あたしは浜松の通夜の会場に到着した。
時刻は８時になっている。
通夜の会場付近は駐車場から出ようとしている車で渋滞ができていて、あたしは式が終わった所に来てしまったことに気付いた。
係員に誘導されて、何とか空いた場所に車を止める。

式が終わったばかりのホールは、まだ別れを惜しむ人々でざわめいていた。
入り口でウロウロしていると、受付の男性が記帳をするように、あたしをテーブルに案内した。
色の白い眼鏡をかけた弁護士みたいな男の人だ。
会社関係の人らしい、岡崎と書かれたネームプレートをスーツの胸につけている。

あたしは、記帳しながら帳面に素早く目を通した。
そこにあたしの愛した人の汚い字が書かれているのを見つけて、鼓動が速くなった。

関係　氏名　　住所　　連絡先
友人　宮崎優　アメリカ　　ｘｘ－ｘｘｘｘ

あたしは思わず、顔を上げてホールの中を見回す。
それらしい人は見当たらない。
でも、優はここにいる！

その時、いきなり背中を叩かれ、あたしは飛び上がった。
「美咲、久しぶり。元気だった？」
眼鏡をかけたＰＴＡ会長みたいになってる合唱部部長がそこにいた。
「あ、先輩、お久しぶりです。連絡ありがとうございました。」
あたしは懐かしさの前に、想像通りの３０代になっている先輩を見て笑いを堪えた。
あたしの考えてる事には気付かず、先輩はハンカチで目を押さえる。
「ごめんね。子供もいるのに出てくるの大変だったでしょう？でも、あたし一人じゃ恥ずかしくって。付き合ってた訳でもないんだから、ずうずうしいよね？でも、あたしの青春を捧げた人だから、どうしても最後にお別れ言いたかったの。」
オバサンになっても乙女チックな先輩に、あたしは微笑んだ。
「大丈夫です。あたしも、お別れ言いたかったです。あ、先にご焼香行ってきますね。」
号泣モードに入った先輩をその場に残し、ホールの中にあたしはゆっくり入って行った。
圭介さんの遺影は、何故か２０代前半の、あたしがよく知ってる頃の写真が使われていた。
履歴書に貼った写真みたいに、リクルートスーツで真面目な顔をした圭介さんがあたしを見下ろしている。
１６年前のままだ。
あたしにはあたしの１６年があったように、彼には彼の１６年があった。

こんなに早く逝ってしまうなんて、あの時は誰も考えてなかっただろう。

彼の遺影を見つめて、あたしは手を合わせた。
その時、あたしの後ろに並んでいる人があたしの背中をつついた。

反射的に振り向いたあたしは思わず、息を呑む。

そこにいたのは、モデルみたいにスタイルのいい、黒のパンツスーツの女性。
長めの髪を後ろにかきあげ、ちょっとワイルドな感じだ。
仕事のできるキャリアウーマンみたいなカッコ良さ。
宝塚の男役の人みたいなその人は、あたしがかつて愛した優に間違いなかった。

「美咲だろ？久しぶり。元気だった？」

あんぐり口を開けているあたしに、優は聞き覚えのあるキレのある少年みたいな声で言った。
でも、少年みたいなのは声だけで、今の優はきれいな大人の女性にしか見えなかった。

「優？今、どこにいるの？」

畳み掛けるあたしを、優は辺りを見ながらシーっと人差し指を口に当てた。
「ロビーに出ないか？すぐ焼香するから。でも、圭介さんが死ぬなんてな。交通事故だろ？ドジだな、圭介さん。でも、俺、圭介さん大好きだったな・・・。」

遺影を見上げて、優は呟いた。
きっと、あたしが知らない事を圭介さんとは共有してたに違いない。
仲間だもんね。

あたし達はやっと人波が収まった、ロビーに出た。
慣れた手つきで、優はタバコを胸ポケットから出して火をつける。
確か、学生時代は吸ってなかったのに。

「元気だった?美咲。今、何してんだよ?」

薄化粧した優は、本当に美人で、あたしは知らない女の人に会うみたいでドキドキしてしまう。
あたしは、少し緊張しながら口を開いた。

「あ、今は専業主婦。子供が小学校に入ったばっかりで・・・。」
言ってから、あたしはハっとした。
優はあたしが結婚したことを知っているんだろうか?

あたしの不安が分かったのか、優は優しく笑う。

「いいよ、知ってるから。旦那さん、学校の先生なんだろ?噂で聞いた。美咲にぴったりだな。おめでとう。」
「あ、ありがと。優は?アメリカにまだいるの?」

質問から開放されたあたしは、今度は優を追及する。
優は昔を思い出すように目を細めた。

「卒業して、実家に帰った後も、俺、就職できなかったんだ。もうこうなったら、自分の好きなことやって生きようと思ってね。アメ

リカ行って、ギター専門の音楽アカデミーに入ったはいいけど、無謀だったよ。アカデミーで会ったアメリカ人とバンドやったりしてたけど、メジャーデビューまでいかなくて解散。金が無くなったから、日本人相手に観光ガイドのバイト始めて、その会社にそのまま就職しちゃったんだ。もう10年くらいかな。年取るよな。」

そう言ってハハハと笑う優は、全然年取ってなかった。
むしろ、以前より綺麗になってるみたいだ。
あたしなんか、どっからみても小学生の子供を持つ母親の顔なのに。
あたしは優が眩しかった。

「あの、優は結婚してないの?」
あたしは聞きづらいことをオズオズと口にした。
タバコを咥えたまま、優はちょっとだけ寂しそうに笑った。

「できないよ。知ってるだろ。俺はもう、誰とも結婚しないな。」
「・・・やっぱり、優は男の子なの?まだ、俺って言ってるよね。」
「俺?だって、アメリカ行ったら男も女も「アイ」だから、気にならないよ。日本にいる時だけは俺って言ってる。それに俺は男が嫌いなんだ。やっぱり女にはなれないな。でも、社会に出るに当たって、空気は読むようになったから、必要ならスカートも履くし化粧もする。ま、臨機応変だ。」
「なんか、優らしいね・・・。」

あたしは付き合ってた頃を思い出して、笑った。
優はそんなあたしを、優しい目で見下ろす。
穏やかな女神様みたいな顔で、優は真面目に言った。

「美咲に謝りたい。その・・・、迎えに来るのが遅すぎたよ。ごめん。でも、俺は一人前になってから、お前を迎えに来ようと思って

たんだ。でも、色んなことが上手くいかなくて。今だって安定した生活とは言い難い。お前が今幸せなら、俺はそれが一番嬉しいんだ。ズルイけど。」

あたしは首を振った。

「あたしこそ、待てなくてゴメン。あたしね、優と付き合ってた頃の三年間、本当に幸せだった。あの思い出だけでこれから一生、生きていけそうだもん。でも、今は夫と子供が大事なんだ・・・。」

「分かってるよ。そう思えるなら今が一番幸せだってことだ。俺がそれが聞きたかった。」

優は、体を屈めて、あたしの耳元に顔を近付けた。
フワっと息がかかり、彼は柔らかい声で囁く。

「今まで、ありがとう。お前を幸せにできなくてごめん。でも、俺はお前以外、誰も好きにならないから。
これからの人生、お前の思い出だけで生きてくよ。」

「・・・ありがとう。でも、もういいの。優も幸せになってよ。」

あたしの言葉に、優は苦笑いした。
学生の時から変ってない、ちょっと悪そうな表情だ。

「俺は、それなりに幸せだよ。恋人には役不足だけど、生まれる前からの付き合いの相棒がいるからな。」

あたしは、はっと口元を押さえた。
会場のエントランスから、ちょうど入ってきた男性に気付いたから

だ。

慶弔用の黒のスーツに黒ネクタイ。
銀縁の細いメガネをした優と良く似たその人・・・。

「おい！良！こっちだ。」

あたしの視線の先のお兄さんの姿に優は気が付いて、大声で呼んで手を振る。
きれいなキャリアウーマンみたいな優が、少年みたいな声で怒鳴ったので、ロビーにいた人たちがぎょっとして振り返った。

優の声に気が付いて、良さんは苦笑しながらこっちに近づいて来た。
１６年前、優と同じ大きさだった良さんは、優より一回り大きくなっていた。
２０歳の時は少年みたいだったのに、今の良さんはどこから見ても大人の男性だ。
華奢だったのが、男らしくガッチリした体格に変っている。

あたし達の前に立った彼は、にっこり笑って挨拶した。

「久しぶりだね、美咲ちゃん。きれいになったな。」

久々に男の人にお世辞を言われて、あたしは赤面する。

「そ、そんなことないよ。もう一児の母だもん。老け込んじゃって・・・。良さんもアメリカにいるの？」

あたしの反応を面白そうに見つめて、彼は答えた。

「いや、僕は愛知県にいるよ。実家に帰っても就職決まらなかったから、1年フラフラしてから公務員試験受けたんだ。今は市営の図書館で働いてる。来年移動だけどね。
でも、あの時は辛かったな。地元で有名だった双子が、大学卒業してから仕事がなくて実家に二人して帰ってきたんだから。世間の目がイタくてさ。せめてどっちかどっか行こうぜって相談して、優はアメリカ行ったんだよな。」

「・・・バカ、カッコ悪い事言うなよ。」

優は逞しくなった良さんの胸を肘で突付いた。
二人が並ぶと、兄妹というより恋人みたいだ。
いや、恋人よりも、もっと確固たる関係。
愛とか友情とか、そんなあやふやな関係ではなく、二人で一つになることで完全体になる生命体。
あたしは二人の揺るがない関係が羨ましかった。

線香くらい上げて来いと、優に急かされ、良さんはホールの中に入っていった。

今しかない。
あたしは、優と付き合ってたときから密かに心に引っ掛かっていたことを、口にすることにした。

「優、今更、もう時効だから・・・聞いてもいい?」
「・・・・?何?」

優はかしこまったあたしを見て、首を傾げる。
口に出すのも憚られる事だった。
でも、あたしはどうしても聞いておきたかった。

「優の初めての人って、良さんなんでしょう?」

優はあたしの言葉に顔を強張らせて、硬直した。
あたしは慌てて、手をパタパタ振ってみせる。

「ち、違うの。今更責めてる訳じゃないの。でも、そうだったらいいなって思って。優は寂しがりだから、一人でいちゃダメだよ。」

優は表情を和らげた。
優しい笑みを見せ、あたしの頭をクシャっとなでる。

「心配してくれてありがとう。確かに、俺は昔から不安定だからな。あいつの存在は助かってるよ。まあ、時効だからぶっちゃけると、答えはイエス。」

・・・ああ、やっぱりそうなんだ。

でも、あたしは全然ショックじゃなかった。
寧ろ、あたしが傍にいることができない優に、頼もしい相方がいたのが分かって安心したのだ。

「でも、恋愛感情じゃないんだ。あいつとの関係は、お前の時とは全然別物なんだ。上手く言えないけど・・・。だから、美咲が嫉妬したりする必要はないんだよ。わかってくれるかな?」

優は申し訳なさそうに、言い訳した。
あたしには、よく分かってた。
優が愛してたのはあたしだってことは、揺ぎ無い事実だった。

「分かってるよ、優。あなたを守ってくれる人がいるなら、それでいいの。あたしも安心したわ。」

やがて、ホールから焼香を終えた良さんが戻ってきた。
反対側から、あたしを探して合唱部先輩がウロウロと近づいてくる。

優は素早く体を屈めると、あたしの頬にキスした。

「美咲と会えて良かった。お前より好きになった人、いないんだよ。多分、これからもね。本当は俺が幸せにしたかったけど、ごめん。でも、今でも美咲が好きだよ。」

あたしは泣かないように、唇を噛み締めて、うんうんと頷いた。
こぼれ落ちてくるあたしの涙を、優の左の指が拭き取っていく。
ザラっとした荒れた感触が頬に触れて、あたしは彼のギターを思い出した。

優は名残惜しそうにあたしを見つめ、いつの間にか傍らにいた双子の兄を見つめる。
気がついたら優の目も赤くなって、潤んでいる。

あたしのこと、まだ愛してくれてるんだね。

優の心が痛いほど分かった。

「じゃ、俺達、行くよ。幸せになれよ、美咲。」
「・・・優も。元気でね。」

そう言って、優はくるりと背中を向けると、出口に向って歩き出した。
その背中を追いかけて、良さんが慌てて追いかける。

もつれ合いながら去っていく二人は、一つの美しい生物みたいだった。

◇◇◇◇

16年も昔の話だ。

あたしも赤面症の女の子から今では母親になった。

でも、今でも暑かったあの夏のことを思い出す。

あたしの前に現われた、一番輝いてたギタリスト。

もう会うことはないだろう。

それでもあたしの心の中で、あの夏はまだ終わらずに輝いている。

Fin.

後編（後書き）

今まで読んでくださった方々、ありがとうございます。
今度こそ終わりです。

またどこかでお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1874v/

Time after time

2011年9月25日14時06分発行